

歌には悲しい思いが凝縮していた
田端義夫が歌った『かえり船』も
またそうであった

『別れ船』で出征兵士を送り
『かえり船』で復員兵を迎える
時代の歌にはいつも哀感が漂った

文 山川智

未だ廃墟の中で呆然と佇む人々

未だ帰りこぬ息子や夫を待つ人々

そんな昭和21年

ラジオから流れてきたのが

『かえり船』だった

波の背に背に ゆられてゆれて

月の潮路の かえり船

待つ人は待ち人を想って泣いた

「かえり船」に揺られた復員兵は

故郷を想って泣いた

霞む故国よ 小島の沖じゃ

夢もわびしく よみがえる

あと二日、あと一日……

田端義夫、バタヤンの声は哀切に満ちていた

細かく震えるビブラートは

心の壁に染み入った

マイクへ向かつての「オースツ」は

観客との一期と一会の往還だった

90歳まで歌い、94歳で没した

レコーディングは

一〇〇〇曲

空前絶後の歌手人生だった



昭和歌謡 誕生物語 【第33曲目】

— かえり船 —

田端義夫

子供の頃『武装警官隊』という松竹映画を
リバイバルで観たことがある。

舞台は昭和21年の大阪。一旗揚げようと故
郷を後にした3人の男たち。だが、彼らには

敵味方になるという数奇な運命が待ってい
た。そんな映画の劇中、復員兵たちで溢

れる夜行列車の中で突然、網棚に寝転んでい
た男がギターを取り出し歌い始めるシーンが

あった。瞬間、疲れ果てた男たちの表情が明
るくなり、涙が頬を伝っていく……。それが、

チョイ役としてこの映画に出演した田端義夫
の歌った『かえり船』だった。

バタヤンこと田端義夫が、ディック・ミネ
に感化されたというギターを胸の高い位置で

構え、「オースツ」という威勢のいい挨拶から
始まる同曲をヒットさせたのは、映画公開と

同じ昭和21年。作詞は清水みのる、作曲は倉
若晴生、当時のゴールデンコンビだった。

『かえり船』はタイトルの通り、敗戦によっ
て朝鮮や満州、樺太などからの引揚者たちの

心情を歌ったもの。歌詞の舞台は博多港だ。
帰還船として使われた軍艦の甲板には、白

い布で包まれた小さな箱を首から提げる軍服
姿の男や乳飲み子を抱え女性などの姿があっ

た。必死の思いで祖国に辿り着いた彼らの目
に映ったのは廃墟と化した日本。この歌には、

そんな人々の万感の思いが描かれていた。
バタヤンは大正8年三重県松阪市生まれ。

3歳で父親を亡くし、赤貧のため慢性的な栄
養失調となり、トラコーマにも罹って右目の

視力を喪失していた。小学3年の半ばで学校
を中退し、名古屋の鉄工所などで働きながら

昭和13年、新愛知新聞社主催のアマチュア歌
謡コンクールで優勝。昭和14年に『島の船唄』

でデビュー後、翌年『別れ船』が出征兵士を送
り出す歌としてヒットする。昭和20年、日本

は敗戦するが、自分自身が見送った船だから
こそ、今度は、彼らを温かく迎えてあげたい、

そんな思いで歌ったのが『かえり船』だった
のである。

『かえり船』が街中で流れていたころ、ラジオ
には「尋ね人」という番組があり、「昭和19年

当時、ハルピンで〇〇に従事していた△△さ
ん、妹さんが連絡を待っています」といった

伝言が連日ラジオから流されていた。そんな
ある日のことだ。大阪駅で復員列車から降り

る多くの復員兵たちと遭遇したバタヤン。み
な憔悴しきっていた。と、その時、プラット

ホームのスピーカーから『かえり船』が流れ
てきた。シーンと静まり返る駅舎。そしてむ

せび泣く復員兵の姿……。その光景を目にし
た田端は、「しみじみ歌手になって良かった

なあと思いましたね」と後年語っている。
年齢を重ねても「キーを落とせば歌が沈む」

と最後までキーを変えずに歌った田端は、歌
唱の障りとなる嗜好品は一切摂らなかつたと

いう。その不断不屈の節制こそが、現役最長
不倒の記録を更新し続けたバタヤンの意地で

あり、心意気であった。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社 週刊誌記者
を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 J
YJを行く』『共にイーストプレス』『ヒューマンドキュメント 幸
せのきずな(リーブル出版)など。また出版プロデュース作品と
して『生きる 義家弘介(スタートアップ出版)』『デキる社員(狂食
ギヤル)』共にイーストプレスなど多数。